

英日翻訳における下訳の修正要因の分析：問題の設計と予備調査

村山 遼

東京大学大学院 教育学研究科

ryo@p.u-tokyo.ac.jp

1 はじめに

1.1 背景

標準的な翻訳のプロセスにおいては、まず原言語から目標言語へと言語間の翻訳が行なわれ、しかるのちに下訳をより良い訳文へと修正する作業が行なわれることが多い。下訳の修正は翻訳者当人が行なうこともあれば、別の人物が担当することもある。下訳は幾度かの吟味を受け、最終的な完成訳として公開される。下訳の修正というプロセスは、質の高い翻訳を産出する上で必要不可欠であり、言語間の翻訳と同様に翻訳の重要な側面をなす。

下訳をめぐる問題、とりわけ「良い翻訳が備えるべき条件は何か」という問いに関しては、Mossop [1] による翻訳者向けの教科書があるほか、実務翻訳におけるクオリティコントロールの観点からは、プロダクトとしての翻訳を評価する客観的な基準を構築しようとする試みも盛んである。これらの諸研究は、翻訳において生じる誤りを類型化することで、修正の理由や目的の包括的な記述を目指すとする研究の方向性をおおむね共有しており、実用的な翻訳の評価基準の作成という観点からは成功を収めているといえる (Secara [2])。

しかし一方で、修正の必要な箇所を検出する個別具体的なプロセスについては、その大半が未だ熟練翻訳者の暗黙知に委ねられているといっている。修正の理由や目的の分類は「なにゆえこの翻訳は良くないのか」という問いに対しては有効ではあるものの、「どのようにしてそれを修正することができるのか」という具体的な手続きの解明に寄与するところは少ない。翻訳初心者が下訳の修正を行なう際のアドバイスを提示したり、それを言語処理のタスクとして取り扱おうとしたときに問題となるのは、むしろ後者である。

1.2 目的

本研究では、下訳／修正訳データより修正の具体的な事例を収集し、修正が行なわれた理由や実際に施された操作の内容を分類する。次いで、それぞれの理由や操作を、そのような修正が妥当とみなされるにはどんなテキストを参照する必要があるのか、という観点から考察し、修正を引き起こすトリガや修正手続きについての分析の一助とする。修正の理由や目的の分類が、事前に与えられた誤りの集合を適切に構造化する試みだとするならば、本研究のアプローチは、そもそもそれらが誤りとみなされるためのメカニズムと要因を明らかにしようとするものである。

分析にあたっての前提をいくつか述べる。本研究の目的は、翻訳者が修正にあたって「実際に」何を考え、どんなツールを用いたか、という行動や意思決定の心理的なメカニズムの解明にあるのではない。ゆえに、第三者が言語表現のレベルで理解可能な限りにおいて、修正操作とその理由や目的を記述する。ここでは分類の客観性についての問題は生じない（そうでなければ翻訳の評価など原理的に不可能である）。また、修正訳が下訳より原則として良い翻訳であることは無条件で認めるものとする。妥当な翻訳の多様性については広く知られた事実であり、修正訳が最良の翻訳であるかの判断は困難である。けれども、下訳とそれに基づく修正訳の比較という観点からは、相対的に何が良くなったかを記述することは十分に可能であると考えられる。

分析にあたっての前提をいくつか述べる。本研究の目的は、翻訳者が修正にあたって「実際に」何を考え、どんなツールを用いたか、という行動や意思決定の心理的なメカニズムの解明にあるのではない。ゆえに、第三者が言語表現のレベルで理解可能な限りにおいて、修正操作とその理由や目的を記述する。ここでは分類の客観性についての問題は生じない（そうでなければ翻訳の評価など原理的に不可能である）。また、修正訳が下訳より原則として良い翻訳であることは無条件で認めるものとする。妥当な翻訳の多様性については広く知られた事実であり、修正訳が最良の翻訳であるかの判断は困難である。けれども、下訳とそれに基づく修正訳の比較という観点からは、相対的に何が良くなったかを記述することは十分に可能であると考えられる。

2 データ

本研究が扱うデータは、石油の枯渇をテーマとしたルポルタージュであり、下訳／修正訳ともに約4,500文である。下訳は翻訳経験の浅い3人（2～5年）の分担によって、また修正訳は経験12年の翻訳者1人によって作成された。この中の第3章の冒頭から50文を取り出して手作業で修正箇所をチェックし、155件を阿辺川ら [3] の基準を参考にして分類した（表1）。

修正の典型的な事例を表2に挙げる。

例1では、(1)「本書執筆時点」という複合名詞は「本書を執筆している時点」という連体節構造に展開され、(2)“they and other directors”を直訳したと思われる「彼らと他の重役たち」は「この二人を含む何人かの重役」と意識されている。(3)取り立て助詞の「は」が削除され、通常のカギ括弧表現へ変更されたほか、(4)副詞節とカギ括弧の直後に読

表 1 修正理由と操作の内容

誤訳である	9
文意がうまく伝わっていない	41
訳文がぎこちない	68
編集の方針に合っていない	20
その他	17
不足情報の付加	36
語の置き換え	22
書式変更（漢字の変換など）	13
読点の挿入	12
関係の明確化	10
語順の変更	8
語の削除	8
提題化	7
節 句 語間の変換)	5
照応詞の具体名詞化	5
述語の態の変更	4
格の交替	1
その他	8
不明	16

点が挿入されている。

例 2 では、(1)「彼ら」から「かれら」への表記変更、(2)「それ以前」の照応解決、(3)「報告書」の照応解決、(4)「報告書でも」から「見たことも」への取り立て助詞の位置変更、(5)読点の挿入、などが施されている。

例 3 では、(1)接続詞「それでは」が削除され、(2)「確認埋蔵量」を囲む鉤括弧の位置が調整されている。また、(3)「B P」から「B P 社」への置換、(4)「B P は～」以降の語順変更と、(5)「実際」直後への読点の挿入、が施されている。

例 4 では、(1)「新しい発見」から「新しい油田の発見」へと名詞句の構成要素が挿入されたほか、(2)助詞「と」が「や」に置換されている。(3)「そして」を挿入することで、「非在来型石油」と「増進回収法」の間の統語構造の曖昧さが解消されており、(4)「増加する石油は～残されている」という節構造が「石油は～増加しうる」に変更されている。また、(5)「どれだけ」から「どのくらい」への置換や(6)「これから」の挿入などが見てとれる。

例 5 は比較のために掲載した典型的な誤訳である。

3 テキストレベルでの要因

3.1 下訳修正の参照項

修正の理由と目的、および実際に施された修正操作の類型化は、先行研究の枠組みを用いることで大まかに把握することができた。しかし、修正の判断の判断をめぐり手続きは依然として不明瞭である。そこで「修正の具体的な操作を決定するにあたって、どのようなテキストを参照する必要があるのか」という観点から、今回得られた事例を分類することにした。ここでの目的は修正が妥当であると第三者が理解可能な前提としての諸テキストの配置を明らかにする点にある。下訳修正への言語処理技術の応用を考えたとき、これらを具体的なインスタンスのレベルで記述し、分析することは、活用する言語資源や素性の選択に一定の見地をもたらし、ひいては真に有用なシステムの構築につながると考える。

以降では、(1)目標テキスト、(2)原テキスト、(3)目標テキストを取りまく目標言語テキスト群、(4)原テキストを取りまく原言語テキスト群、の各項目について説明する。

3.2 目標テキストへの参照

目標テキスト、すなわち下訳のみによって判断可能な目的および操作としては、統語構造の明確化や、書式変更が挙げられる。これは下訳の修正における“monolingual checking”に該当する。たとえば表 2 の例 4 に挙げたような統語構造の曖昧さは、標準的な日本語の話者であれば検出可能である。漢字の表記や送り仮名のふり方といった書式に関する修正もまた、いくらかの標準的な慣習を前提としつつも、テキスト内部での一貫性が重視されるという意味で、下訳それ自身が要請する修正であるといえるだろう。

3.3 原テキストへの参照

原文の文意が適切に反映されているかどうかを検討するには、当然のことながら原文と下訳とを見比べる必要がある(“bilingual checking”)。今回の調査では、下訳それ自体に情報内容の欠落や誤認に対する修正はほとんど見られず、むしろ下訳で意識されていない原文の主題構造や結束性、話し手の態度の明示化を意図した修正が多くみられた。操作としては語順の変更や照応の解決、語形変化などが該当する。前述の例における「新しい発見」から「新しい油田の発見」への修正や、「それ以前の報告書」に対する照応の解決などがそうである。これは Baker [4] の見解とも一致する。また、原文や下訳では読解の際に前提とされる知識

表 2 修正の具体例

例 1	
原文：	As I write, they and other directors face criminal prosecution in the United States.
下訳：	本書執筆時点において彼らと他の重役たちは米国で刑事訴追を受けている。
修正訳：	本書を執筆している時点で、この二人を含む何人かの重役が、米国で刑事訴追を受けている。
例 2	
原文：	Neither have they seen such caveats in earlier reports.
下訳：	そもそも彼らはそれ以前の報告書でもこうした警告を見たことがないのである。
修正訳：	そもそもかれらは、二〇〇四年版以前の『B P 世界エネルギー統計年鑑』では、こうした警告を見たこともないのである。
例 3	
原文：	So what is BP's real view of "proved" reserves?
下訳：	それでは「確認」埋蔵量について B P は実際どのように考えているのだろうか？
修正訳：	「確認埋蔵量」について、実際、B P 社はどのように考えているのだろうか？
例 4	
原文：	How much oil remains to be added via new discoveries, enhanced recovery techniques and so-called unconventional oil?
下訳：	新しい発見と増進回収法、いわゆる非在来型石油によって増加する石油は、どれだけ残されているのだろうか？
修正訳：	新しい油田の発見や増進回収法、そしていわゆる非在来型石油によって、これからどのくらい石油は増加しうるのだろうか？
例 5	
原文：	In fact, why not sign me up for an SUV while you're about it?
下訳：	事実、読者の皆さんが代替エネルギーの問題に関わっているのなら、私に S U V の購入契約をさせようとはしないだろう。
修正訳：	実際、せっかくだからこの際、私も S U V の購入契約をしても悪くないのではないだろうか？

を、修正訳において明示する傾向もみられた。「B P」を「B P 社」に置換したのも、英米系の石油企業である“British Petroleum”に対する英語圏、日本語圏での認知度の違いを考慮すれば、妥当な修正である。

下訳が原文の読解に失敗しているとみなされ、文構造や内容を全面的に変更されている例もみられたが、これは下訳の修正というよりはむしろ典型的な「誤訳」を理由とした翻訳のやり直しであるため、本研究における分析の範疇からは除外する。

3.4 原言語テキスト群への参照

翻訳によっては、原文以外のテキストを参照する必要がある。たとえば、翻訳したいニュース記事を理解するような予備知識として同一ジャンル

の関連記事を参照したり、同一作者、同一時期の著作から原文の文体的特徴を判断する可能性も考えられる。しかし、今回の下訳 / 修正訳の比較のみではそれを確認することは難しい。

3.5 目標言語テキスト群への参照

「世界の石油の埋蔵量」から「世界の石油埋蔵量」への修正といった事例では、両者とも文法的に適格であり、かつ情報内容の変更も行なわれていない。これは翻訳における自然さや流暢さという観点からの修正であり、下訳に先行する日本語のテキスト群においてどちらが頻繁に使用されているか、という問題である。「こうした思いやられる始まり」を「先の思いやられるようなこうした問題」に変更するような事例も同様の原理が働い

ていると考えられる。

参照先のテキストに様々なタイプが考えられる点は、具体的な手続きの記述という目的からは留意すべきである。代表的な例を挙げるだけでも、英和辞書、類語辞書、百科事典、用語集、対訳辞書といった伝統的なツールに加え、近年ではとりあえず Google のヒット数を比較するという手段もしばしば用いられる¹。けれども、辞書や事典として体系化されたテキストをウェブ上のテキスト群と比較した場合の機能の差異の問題や、英和辞書の内容をそのままつなぎ合わせた表現こそ直訳調の謗りを免れないことをからもわかるように、自然さや流暢さを議論する言語単位の同定の問題については、未だ明らかになっていない。

4 社会的・文化的要因

機能的翻訳理論においては、前節で述べたテキストレベルでの要因に加え、翻訳にまつわる社会的・文化的要因の重要性が強調されることが多い。その上で、テキストが意図している情報伝達の機能や、想定される読者層、メディアのタイプ、出版社の経済的事情、言語間の権力関係といった背景的な要因が、テキストよりも上位のレベルにおいて翻訳の質を決定づけている (Munday [5])。同一の表現が異なる背景に応じて全く異なる評価を受ける可能性については、今回のようなルポルタージュのようなジャンルではあまり顕在化しないと考えられるが、「BP」と「BP社」の例のように、対象読者層を考慮した訳語の選定は翻訳においてしばしばなされるものである。しかし翻訳者が最終的な意思決定を下し、そしてその判断が妥当性が担保されるのは、いずれにせよテキストの水準においてでしかありえない。その意味では、House [6] も主張するように、社会的文化的な要因は外的あるいは二次的なものであり、参照項の範囲を制約するパラメータとして間接的に作用するものと考えられる。

5 今後の課題

本研究は、翻訳における参照項という概念をもとに、下訳に対して実際に行なわれた修正操作を分類し、下訳の修正というプロセスの手続きを記述しようと試みた。最後に今後の課題を述べる。

1 つめは参照項という概念についてである。翻訳者が用いる各種ツールが妥当な訳文を構成する際に果たす役割については、なお整理を要する。2

つめは、下訳の生起に関わる問題である。そもそもどうしてこのような下訳が生まれたのか、という下訳の生起に関わる問題については言及することができなかった。たとえば前述した “they and other directors” を「彼らと他の重役たち」、「new discoveries」を「新しい発見」と逐語的に翻訳した下訳はいずれも修正されており、今後は修正を引き起こすトリガとしての原文の特徴も分析する必要がある。以上の課題を、より詳細なデータの分析と平行して解決する予定である。

参考文献

- 1) Mossop, B. (2007). *Revising and Editing for Translators. 2nd edition.* St. Jerome Publishing.
- 2) Secara, A. (2005). Translation evaluation: A state of the art survey. *eCoLoRe / MeL-LANGE Workshop*. 39-44.
- 3) 阿辺川武, 影浦峽. (2008). 下訳から修正訳への訳文修正要因の分析. 言語処理学会第 14 回年次大会. 253-256.
- 4) Baker, M. (1992). *In Other Words: A Coursebook on Translation.* London: Routledge.
- 5) Munday J. (2008). *Introducing Translation Studies. 2nd edition.* London: Routledge. [鳥飼玖美子訳. 『翻訳学入門』東京: みすず書房, 2009.]
- 6) House, J. (2001). Translation quality assessment: Linguistic description versus social evaluation. *Meta*. 46(2), 243-257.

¹ Google で検索結果は「世界の石油の埋蔵量」が 50,200 件であるのに対して、「世界の石油埋蔵量」は 266,000 件である。